

日本事情教育の一視座としての日本人論

小川 貴士

キーワード：文化の独自性 伝統の創造 文化論の消費 異文化背景を持つ学習者
複眼的にインターアクティブなクラス活動

〔要旨〕 日本事情教育にも用いられる所謂日本人論について、その言説の成り立ちと言説の「消費」行為に焦点を当てる試みが社会学から出されている。一つには、伝統というような文化の独自性は時代の都合に応じて創造されたものが含まれているという点、もう一つには、文化論言説の認識は、認識者の文化背景によって変化するという点である。

この試みを一視座として日本事情教育を見ると、多様な文化背景を持つ学習者群を対象とする日本事情教育のクラスでは、文化・社会事象に対して常に複眼的にインターアクティブなクラス活動が肝要である。

1. はじめに

日本語教育の一分野としての日本事情教育は、日本語習得を補完し、日本語学習者の日本での生活への円滑な適応を促進するという位置付けがこれまでなされたきたが、日本語教育の広範化、そして日本研究の深化、及び日本語を駆使して専門職で活躍する外国人の増加に伴い、補完的な役割だけでは不十分な状況が現れてきている。日本事情教育が不十分である一つの理由として、文化論的な議論を十分に視野に入れていない言語教師が、日本事情教育を担当してきたということが挙げられるが、これは、或る意味では、戦後の日本語教育の歴史、特に1970、80年代の急激な日本語需要の伸びというコンテキストの中ではやむを得ない現実でもあった。しかし、所謂ボーダレス化が更に進む現在、やはりこうした状況を見直す必要があることは明らかであろう。

不十分な状況というのは、具体的には、日本語教育の分野で、類型化、単純化された日本の姿が日本語学習者の学習項目になってしまっているという点である。これは、近年、文化人類学者や社会学者から指摘されている点である。例えば、杉本（1996）は以下のよう

日本語の教科書や参考書は「日本ではこうすることになっている」「日本人はの
ように考え、行動する」という趣旨の記述が多い。日本社会内部の多様性や階層
文化について触れた部分は少ない。日本人は均質に描かれがちである。しかも、
日本語の教員は日本社会や日本文化についての専門家ではない。彼らの多くは、
安易に手に入る日本人論などをそのまま信じ込んでいる。そのうえで日本や日本
人についてのステレオタイプを日本語学生に伝授する役割を果たしがちである。

「正しい名刺の出し方」「正しい女性的話し方」「正しい応答の仕方」などの言語教育を通して、単一の規範がたたき込まれる。⁽¹⁾

「安易に手に入る日本人論などをそのまま信じ込んでいる」という記述は、言い過ぎだと言わざるを得ないが、文化を扱う学問分野での議論の積み重ねに目配りが十分でないという指摘は、今、日本語教育に問いかけられている大きな課題であると言えよう。

前稿（小川 1996）では、文芸批評論からの知見を中心に日本事情教育の問題に光を当てようと試みたが、この小論では、社会学における議論、特に「伝統の創造とその消費」という文化認識の方法論に拠りながら、日本事情教育の一つの可能性について論じてみたいと思う。

2. 文化の「独自性」という議論

外国語教育の場では、一般的に、言語そのものの習得とともに文化の理解が並行して強調される。その際に、文化を体系的に記述したものを用いながら、また文化的諸活動に参加しながらその文化への理解・適応を図ろうとする。しかし、文化の記述は単純な作業ではなく、また、その記述物の理解・認識も複雑な諸相を持っている。

現代の社会学者・文化人類学者の基本的なスタンスは、知識人または政治・文化エリートが文化を記述する際の過度の一般化・類型化に対する批判的態度であるが、歴史的に見て、一つの文化のエトスを抽出し、その独自性を主張することは、世界の様々な社会の様々な契機で見られてきた現象である。例えば、18世紀から19世紀初期にかけてのウェールズでは、イングランドへの同化への危機感を持った知識人達が古来の言語・文学等の伝統を復興し、ウェルシュ・アイデンティティを確立しようとした。また、トルコにおいても、イスラム化以前のトルコの言語・習俗の評価を高める必要性が19世紀末に「トルコ主義」という形をとって現れている。更に時代が下って、1940年代のオランダでは、オランダ人は自由主義・個人主義的で、平和を愛する民族の特徴がある、という主張がなされた。これは、ナチスドイツがオランダ占領を正当化するために両民族の人種的、言語的親近性を強調することに対抗してなされた民族独自性論と見ることができる。また、最近の例として一般によく知られたところでは、1970年代以降のフランスにおけるナショナル・アイデンティティ保持の動きが挙げられよう。アメリカを中心とする英語大衆文化のフランス「侵略」に対抗する形で、特に言語の面での両文化の境界線引きを行なった例である。⁽²⁾

以上の例は、文化の独自性を主張する数々の例の氷山の一角に過ぎないが、ここで言うことは、社会の交流の進行（それが経済発展の様に肯定的に捉えられるものであれ、戦争のように否定的なものであれ）とそれに伴う社会の変動に対する意識が文化の独自性・特殊性を主張する動機となり、他の文化との差異化を促進する過程に繋がっているということである。

独自性を主張する際に、よく用いられる手段は古い時代に対する肯定的イメージとの関連付けである。「それがこの文化の伝統だから」という論法は、議論の余地を与えない或る種の説得力を持つが、文化を扱う学問領域で近年「伝統」という概念の見直しが進み、「伝統」とは、時代によって知識人や政治・文化エリート達によって、古い時代の文化事象・要素の中から現代社会に都合の良い部分を取り出して再構築された表象である、という知見が出されている。例えば、イギリスにおける「ヘリテージ・インダストリー」と呼ばれる商業分野は、産業革命で工業化された英国各地の工業衰退に伴う時期に、ツアリズムを中心とする産業によって展開された英国の「ヘリテージ」を前面に押し出す運動である。この運動は新しい商業的価値を産み出し、英国の過去のカントリーサイドのイメージをファッション分野で成功させたローラ・アッシュレイなどの企業家も現れている。社会学者は、また、「ヘリテージ・インダストリー」の成功が、所謂祖先神話と祖先文化を体系化する古典的歴史主義とは別の形で、ナショナル・アイデンティティを新たに創造し、構築してゆくことに貢献していると指摘している。⁽³⁾ ここで出されている「伝統の創造」という見方は、再構築された「伝統」は過去にあった実際のものとは異なった新しいものであるが、その表象を大衆が伝統と意識し、他者との差異化を行なうという現象である。(この現象が、更に社会の中でどのように機能し、何を生み出すかということについては第4節で論ずる。)

3. 日本人論における日本文化の独自性

社会交流の進行と社会変動というコンテキストの中で戦後の日本人論を見ても、やはり同様のことが言える。それ以前、明治から第二次世界大戦にかけても、日本からの大陸への膨張という軍事的社会「交流」が進展したため、民族論は絶えることがなかったが、小論は現在の日本事情教育を論ずるものであるから、現在に直接的に影響していると考えられる1970年代以降に焦点を絞る。

特に経済的な交流の拡大に伴って人的交流が盛んになった1970年代、80年代には、「日本民族の同質性（単一民族性）」「擬似制家族集団」「集団主義」「タテ社会」「情緒的思考」「言語の特質（言霊）」といったような概念で表象される要素が、日本社会の安定と経済的繁栄をもたらすのに中心的役割を果たした、という論理が組み立てられ、こういう表象から文化全体を捉えて日本文化がユニークであるという言説が主張された。敗戦後の自己反省的日本文化論の論理を裏返したようなこの文化認識は、青木（1990）によれば、日本人論の変容の歴史の中では「肯定的特殊性の時代」⁽⁴⁾ に位置付けられ、日本語教育という立場から見れば、外国語としての日本語需要が飛躍的に伸びた時期とも軌を一にしている。この時期の日本人論で用いられる論理は、前章で論じた「伝統の創造」という方向性、即ち、こうしたユニークな諸概念は日本に伝統的に存在し、日本人が古来から一貫して持ち

続けてきた心性であるという結論に導かれててゆく。この時期には、日本の文化エリートだけからではなく、海外の識者達からも同じような論理で日本社会の発展を肯定的に論じる著作も現れ、「独自性」の思潮は或る意味で頂点に達した。

独自性の主張に見られる文化事象の一般化については、文化人類学と社会学から繰り返して警鐘が鳴らされてきた。一つには、何に対しての独自性かという問いである。例えば、「タテ社会」という「独自性」は、韓国からの日本語学習者にはユニークなものとは感じられない概念であるし、それに付随する日本語の敬語現象も彼らには習得にあまり時間のかからない文法項目である。この問いについて文化人類学者・社会学者は、基本的共通理解として、日本人論に見られる「日本の独自性」はアメリカ社会を照合枠としていると論じている。

また、二つ目には、クラカワらの言う、日本の経済発展を扱う日本人論が外国からの先端技術の入手可能性、高水準の投資率、豊富な労働力、好意的な国際環境などの客観的な経済指標をを考慮していない、という批判がある。これは、日本文化だけが特殊であるというのは日本人が持ちたがる幻想である、といった主張⁽⁵⁾とも繋がるものである。(ただ、この主張は、独自性を主張するのが日本人の独自性である、という一種の循環論に陥ってしまっている。)

第三の点は、特徴的な文化事象を「伝統的」だとする考え方の虚構性が近年の研究の積み重ねで明らかにされてきていることである。例えば、日本人論の枠内にある概念の一つ、「日本人の単一民族性」という「伝統」は、小熊(1995)によれば、戦前には膨張的軍国主義を正当化するための概念装置として用いられ(つまり、日鮮同祖論を生み出し)、現況においては、国内問題を扱う概念装置として、沖縄、アイヌ、在日の人々の問題を軽視する政治的イデオロギーと深く関わっているとされる。⁽⁶⁾ また、「擬似制家族集団」という表象は、明治期の国家と神道の結び付きの頂点に天皇を置くことによって、天皇家を「本家」とした「分家」的存在として国民全体を位置付けた政治形態に端を発していると論じられている。その場合、この「伝統」は、たかだか100年程の歴史しか持たないことになる。このような「伝統」は、本来その言葉が持つ「ある民族や社会・団体が長い歴史を通じて培い、伝えてきた信仰・制度・思想・学問・芸術など。特にそれらの中心をなす精神的在り方。」⁽⁷⁾ という内容のものではなく、寧ろ、時代に合わせて政治・文化エリート達によって創造され、または、変容された新しい概念であることが少なくない。新しい「伝統の創造」について、吉野(1997)は、グローバル化が進行すると、国境以外にも何らかの形で境界線を引く必要性を感じるグループが他との差異化を図るために、或る意味では防衛的に、また、或る意味ではナショナリズム高揚のために行なう作業であると論じている。⁽⁸⁾ もう少し客観的な言い方をすれば、或る目的のために「想像上の共同体」を作る営みで

あると定義することもできよう。

4. 記述された文化表象の「消費」

「伝統的な独自性」は、時代に応じて創造、または変容されたものが含まれている。そこで、重要になってくるのは、文化の特徴的表象概念についての言説を大衆が「消費」する（つまり、その言説の枠組みに沿って文化を認識する）という概念である。更に、消費する行為によって、消費者（読者）、ひいては社会に何がもたらされるかという問いである。

文化論の消費行動については、まず、誰が消費するのかという問題がある。所謂「日本人」が消費する場合と、異文化を背景とした日本語学習者が消費する場合ではその意味合いが異なってくるのは当然のことであろう。この部分は、前稿（小川 1996）で論じた文化事象の「読み（解釈）」と重なっている部分であり、実際に近年の社会学の分野でも、文化の消費者がそれまでにどのようなテキストを読んでいるか（どのような知識の積み重ねがあるか）という視点、即ち、文芸批評論で言う *intertextuality* の問題が意識され始めている。

さて、まず前者、即ち「日本人」が日本人論を消費する場合について見てみると、これについては、日本人論で肯定的独自性論が勢いを得るのと時期を同じくして、この種の独自性論は、日本社会の枠内で支配イデオロギーとして機能しているのではないかという論調が現れている。⁽⁹⁾ また、戦後、占領軍から「与えられた」民主主義というコンテキストの中で自らのアイデンティティを創造・再構築する文化ナショナリズムとしての役割を果たしているという見方もある。例えば、この点について、国際日本文化センターの設立をめぐるかなり微妙な論議がある。国際日本文化研究センターは、国際化時代を予期して、開かれた日本研究の場としての性格づけがあり、日本人論を含む多くの日本研究を生み出してきた。しかし、一部の研究者・識者からは日本の文化ナショナリズムを体系化する学問機関という指摘もある。例えば、現センター所長の河合隼雄のユング的古代神話解釈は文化を共有する民族の無意識の心理領域に光を当てるとされるものだが、日本の古代神話を『古事記』『日本書紀』に求め、そのユング的解釈が日本人の無意識を明らかにすると考えるならば、記紀に日本人の民族的心性を見る文化ナショナリズムと読まれる可能性があるからである。

一方、後者、即ち異文化を背景に持つ文化論消費者（外国語としての日本語学習者もこの範疇に含まれると言ってよい）には何がもたらされるのであろうか。支配イデオロギーや文化ナショナリズムという概念は、この範疇の文化論消費者には当てはまらない。彼らは、日本人論をどのように「消費」するのか、また、日本人論の中に何を「読む」のか。それによって何が意識化され、何が（或いは、何か）構築されるのか。日本人論そのものが彼らにとって日本文化・社会を理解するのに適当な記述物なのか。これこそが現在の日本事情教育に問われている問題なのである。

5. 日本語教育との関連

1980年代後半になって日本語学習用の教科書に文化・社会項目を意識的に組み込んだものが見られるようになった。言語習得理論の分野での「コミュニケーション・アプローチ」の進展は、談話分析などの研究を基に、コミュニケーション・パターンの文化的特徴を意識したクラス活動を推し進めてきた。また、読解用の教材も、文化的・社会的特徴を意識した著者が試行を重ねながら、様々な文化論的、或いは、異文化適応マニュアル的読解教材を編んでいる。この点では語学プログラムと日本事情教育とのオーバーラップ化が進んでいると言えるが、ただ、会話クラスにおけるコミュニケーション・パターンの文化的特徴にしても、読解教材に盛り込まれた文化論的表象概念にしても、どんな学習者を対象にした文化的特徴なのかが曖昧であることや、著者自身の世代の考え方が色濃く反映してしまっていて世代差を含む日本社会の階層性に起因する文化の多様な相に十分な配慮が払われていない等の問題が残っている。或いは、日本で起こっている社会問題を取り上げて日本の文化・社会的な面に注目させる教材も現れているが、一つには、社会問題化している項目に目が行き過ぎて、教材全体が悲観的な暗いトーンを帯びてしまっている点、そしてまた、それらの問題を一面的な見方でしか論じていないきらいがある。⁽¹⁰⁾

第4節までの論点と日本語・日本事情教育を結びつけるのは、学習者中心のコース・デザインという概念である。文化事象、社会構造、行動パターン、心性といった文化論的表象は、学習者（認識者）に「消費」されることによって彼らの持つ認識の枠組みの中に取り込まれ、その枠組みと照合されて初めて理解され、消化される。異文化を背景とする学習者に対して日本人論の言説が不十分である原因は、言説自体が類型化や「創造された伝統」など虚構的表象といった性格を持っていることに加えて、認識者側からの力が加わる文化認識過程のメカニズムに十分な配慮がなされていないという点にある。換言すれば、文化の独自性を闇雲に主張しない、類型化が避けられた日本人論が仮に現れたとしても、認識者の側から働きかける力とのダイナミズムの中に、その日本人論と主観的に反応しながらまた別の形で日本文化・社会像が姿を現わす可能性をコース・デザインの基本とする必要があるということである。日本事情のクラスにおいて、文化論の「消費」という概念はこのような過程を意味することを忘れてはならないだろう。

6. 日本事情教育（文化プログラム）への応用

この節では、文化論の「消費」過程を基に、日本事情クラス（文化プログラム）の一試案を提示してみたいと思う。

まず、日本事情のクラスは、基本的に三つの要素から成り立つ。①文化の記述物（日本人論のテキスト）、②教員の日本文化認識、③学習者（認識者）の異文化背景であ

る。この三つの要素が相互に関連しながら、文化の把握が行なわれてゆく。第一に気を付ける点は、学習者の文化理解を教員が持つ文化認識の方向に収斂させるべきではないこと。これは、教員が選んだテキストに著わされている文化の姿の中に作り出されている類型化や虚構的表象を鵜呑みにさせてしまうことと、教員自身が日本社会の中でどのような階層的位置付け（世代等）にあるかという問題を曖昧にしてしまうからである。次に気を付ける点は、学習者（認識者）の異文化背景をその出身国や母文化から規定し類型化しないこと。日本文化の対照枠としての異文化背景というのは有効な概念であるが、例えば、アメリカ人なら「アメリカ文化」、インド人なら「インド文化」という枠組みを教員の立場から規定してしまうことは、今まで論じてきた日本人論に対する批判を他の文化に対しては無条件に放棄してしまっていることになる。「照合枠としての異文化」という概念が有効なのは、各々の学習者（認識者）個人の経験（または、記憶）の積み重ねとして異文化背景を捉える場合である。

以上の二点を大枠でまとめてみると、学習対象となっている文化と学習者（認識者）が持つ異文化はそれぞれが客観的な実体として存在しているのではなく、主観的・個人的な認識事象として存在している。だから、一つの固定した文化からもう一つの固定した文化へ適応させるという考え方そのものを問い直さなければならない。複眼的な見方で文化の姿を考えてみるという営為そのものが日本事情クラスであるということである。

コース・デザインとクラス運営のもう少し技術的な提案としては、学習者（認識者）の原体験を起点にクラスを進めてゆくことが大切である。しかし、まったく何もないところから体験はできないので、テーマとそれに関連する基本項目語彙は与える必要がある。類型的な枠組みを与えてしまうことを避けるために、記述物（日本人論など）から出発するのは適当ではない。経験できるテーマ（例えば、生け花や座禅など）は経験した所感をそのテーマについて教員の持つ認識と照合してみることや、複数の日本人学生と議論して見ることが学習者（認識者）の経験を更に意識化させる上で望まれるところである。この際に、最初に導入してある基本項目語彙が活かされることになる。経験できないテーマ（例えば、中学・高校受験など）は複数の日本人にインタビューをすることによって様々な意見が得られようし、その結果について議論することであるまとまった形として捉えることができよう。つまり、常に複眼的にインターアクティブであることが日本事情クラスを貫く基本線となっていることが肝要である。日本人論的記述物の読みは、そうした活動の後に位置付けられているのが望ましい。

加えて、前稿（小川 1996）でも指摘したように、文化事象の認識は常に「通過点」であるという認識に立ちながら、議論などのインターアクションや日本人論等の読みから派生してくる更なる問題点、視角を時間をかけて追いかけてゆくことが、学習者（認識者）の意識の中で捉えられた日本文化の像（結果として、それが時間とともに変容してゆくこ

とになるとしても)に新たな次元を与え、深化された理解を獲得する道筋となろう。

7. おわりに

拙稿を通して、主に社会学における「日本人論」論と文化論の消費に関連させながら日本事情教育(文化プログラム)の一つの在り方を論じてきた。

結論としては、①文化論的言説には類型化と虚構的表象(創造された伝統等)が不可避免的に内在する、②文化認識は文化論に記述されたものだけではなく、認識者の「消費」という行動もキー・ファクターである、③「消費」行動には認識者の意識(日本語教育の場合は、異文化背景)という照合枠が存在している、という三点を踏まえて、複眼的に文化事象を扱ってゆくコース・デザインが必要である、ということになる。

本稿では、視座としての理論面を重視したために、実際に学習者(認識者)達が前述した形式のカリキュラムの中でどのような認識をしたかという具体的な事例は扱わなかった。これは、次稿の課題としたい。また、帰国子女の(異)文化背景と日本事情教育という問題についても、様々な論点が残されたままになっているが、これについても別稿で論じることができれば、と考えている。

現在までの日本事情教育は、経験主義的な方法論で試行してきた感がある。本稿がこの分野での理論的な枠組みを考える上で一石となれば、と願っている。

注

- (1) 杉本(1996) Pp.26-27
- (2) 吉野(1997) Pp.53-70, Pp.80-98
- (3) 同 Pp.71-74
- (4) 青木(1990) Pp.81-125
- (5) Dale(1986)を参照
- (6) 小熊(1995)を参照
- (7) 新村(1991) P.1789
- (8) 吉野(1997) Pp.90-98
- (9) ベフ(1987)を参照
- (10) 小川(1995)を参照

参考文献

- 青木 保（1990）『「日本文化論」の変容』中央公論社
- 小川貴士（1995）「書き下ろし教材一考」『日本語教育の課題』国際基督教大学日本語教育プログラム・日本語教育研究センター
- （1996）「異文化理解における『文化テキスト』の読みと認識」『IC U日本語教育センター紀要』5 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 小熊英二（1995）『単一民族神話の起源』新曜社
- 河村望（1982）『日本文化論の周辺』人間の科学社
- 新村出編（1991）『広辞苑』第四版 岩波書店
- 杉本良夫（1996）「日本文化という神話」『日本文化の社会学』井上俊、吉見俊也ら編、岩波書店
- ネウストプニー, J. V.（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 細川英雄（1994）『日本語教師のための実践「日本事情」入門』大修館書店
- ベフ, ハルミ（1987）『イデオロギーとしての日本人論』思想の科学社
- 南 博（1994）『日本人論 明治から今日まで』岩波書店
- 吉野耕作（1997）『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会
- Dale, Peter（1986）The Myth of Japanese Uniqueness, London: Croom Helm